



2025年度（令和7年度）

## 「第1回 不登校を考える学習会」を開催しました。

2025.7.12（土） 小郡市人権教育啓発センター

### 演題：「私が学校に行かない選択をしたとき ～ 不登校当事者と母の話 ～」

2025年度「第1回 不登校を考える学習会」を7月12日（土）14:00より小郡市人権教育啓発センターにおいて開催しました。

今回の講師は、長崎県にお住いの熊井 万希子さん（娘）・牟田 純子さん（母）親子にお越しいただきました。今回の学習会のテーマは「不登校当事者の体験」です。中学校1年生の11月から学校に行かなくなり、家で過ごした時期から、家を出られるようになった過程など、どのように元気を取り戻していったのか、順を追ってお話ししていただきました。そして不登校の娘を支え続けた母親としての様々なエピソードについても話していただきました。当事者だからこそ感じたこと、関わり続けてくれた周りの大人のことなど、包み隠さずにいろいろなことをお話ししてくださいました。今回の学習会には、40名の方にご参加いただきました。学習会の内容についてご紹介します。



#### ○ 「不登校になる前」… 学校に行かなくなる前兆はあったのか？

熊井さんからはまず、「不登校になる前」についてのお話がありました。中学一年生という多感な時期に学習や部活動を一生懸命にがんばっていたこと。そんな中、周りでいじめが起きていたことや自身の成績下がっていき、心と体が折れてしまい学校に行けなくなったこと。そんな自分の状況がなぜかさえ「わからない」という戸惑い。学校にいけないという現実が目の前にある…という状況だったそうです。当時はなぜだかわからず、後から理由を考えると、「授業についていけなくなったこと」、「責任感の重さ」、「無力感」、「休息が必要だったのでは」などが思いついたそうですが、やはり「なぜだかよくわからない」という気持ちが一番大きかったそうです。



#### ○ 「不登校を経験して」…

学校に行かなくなってからは、朝起きれなくなったり、朝の欠席連絡にストレスを感じたりしながら、自分自身の自尊感情がどんどん下がっていきました。「周りからどう思われているかが、とても気になる自分」、「学校に行かないことを責める自分」、「なぜ行けないのか、わからない自分」、「生きていても良いのかな…と希望

を失う自分」…など、何事にもネガティブになってしまう毎日だったそうです。そんな万希子さんを支えたのが、純子さんの存在でした。何とか万希子さんを支えようとするやり取りの中で、「手が冷たかね。」（純子さん）「生きてないもん。」（万希子さん）というエピソードに心が締め付けられる思いがしました。何とか学校に行くためには、「たくさんのエネルギーが必要だ！」と感じた万希子さん、純子さんは、友達に会いたい、行事に参加したいという思いを少しずつ重ねていきながら日々を過ごしていかれました。そんな二人の意欲を大切にしてくれる先生やたくさんの友達の存在が支えとなりました。

## ○ 「元気になるまでの過程」… 居場所の存在

それから、不登校の時期を脱し、どのように元気になっていったのかについてお話してくださいました。家庭ではスキンシップや小さなありがとう、そして笑いを大切にされたそうです。それまで感じていた学校内での様々な競争や、いつも何かと比べることなど、感じていたモヤモヤを解消する「すっきり体験」を通して、モヤモヤとした気持ちが言語化されたり、ボランティアをすることで、ありのままの自分でいられたりしながら少しずつ元気を取り戻していかれました。母親以外の人からも受容してもらえ、家庭以外の場所でも自分を出してもいいと思えるようになった万希子さんは、ありのままの自分を取り戻していきました。最後に、「どんな大人に救われたか？」というお話の中で、「ジャッジをしない人」、「ただただ自分の話を聴いてくれた人」、「アドバイスをしたり、指導的な立場からものを言ったりしない人」、「しっかり向き合い、正直にフラットに接してくれる人」、「温かく見守り、待ってくれた人」という、子どもに接する際の大切なことを教えていただきました。



参加者の皆さんからは、「自分の思う方向に進めようとしていないか、見つめ直していきたいと思いました。」、「理解、安心、タイミング、観察、めげずに働きかけ、こちら側が温かく見守ること。とても感心しました。」といったご感想をいただきました。万希子さんと純子さん親子の、息の合った軽妙なやり取りがとても印象に残る、第1回の学習会となりました。

### 参加者アンケートより

- 不登校を経験された万希子さんの話を聴き、不登校になってしまった心の様子や気持ち「何が原因かわからない」ということを考えさせられました。その中で元気になっていった過程も「いきつ もどりつ」であることもわかりました。
- 見守る母の立場から支えられてきた経験にすごく共感が持てました。ていねいに説明していただきわかりやすかったです。自分の子育て時代を反省しています。
- ご本人、お母様それぞれの実体験にもとづくお話を聞いて、自分の子どもが不登校のころを思い出しました。もう少しできることがあったのではないかと、色々考えさせられました。
- ついつい「ジャッジ」して、ついつい「アドバイス」していたような気がします。その子が何を求めているかについて、まず考えてみる必要があると思いました。



